

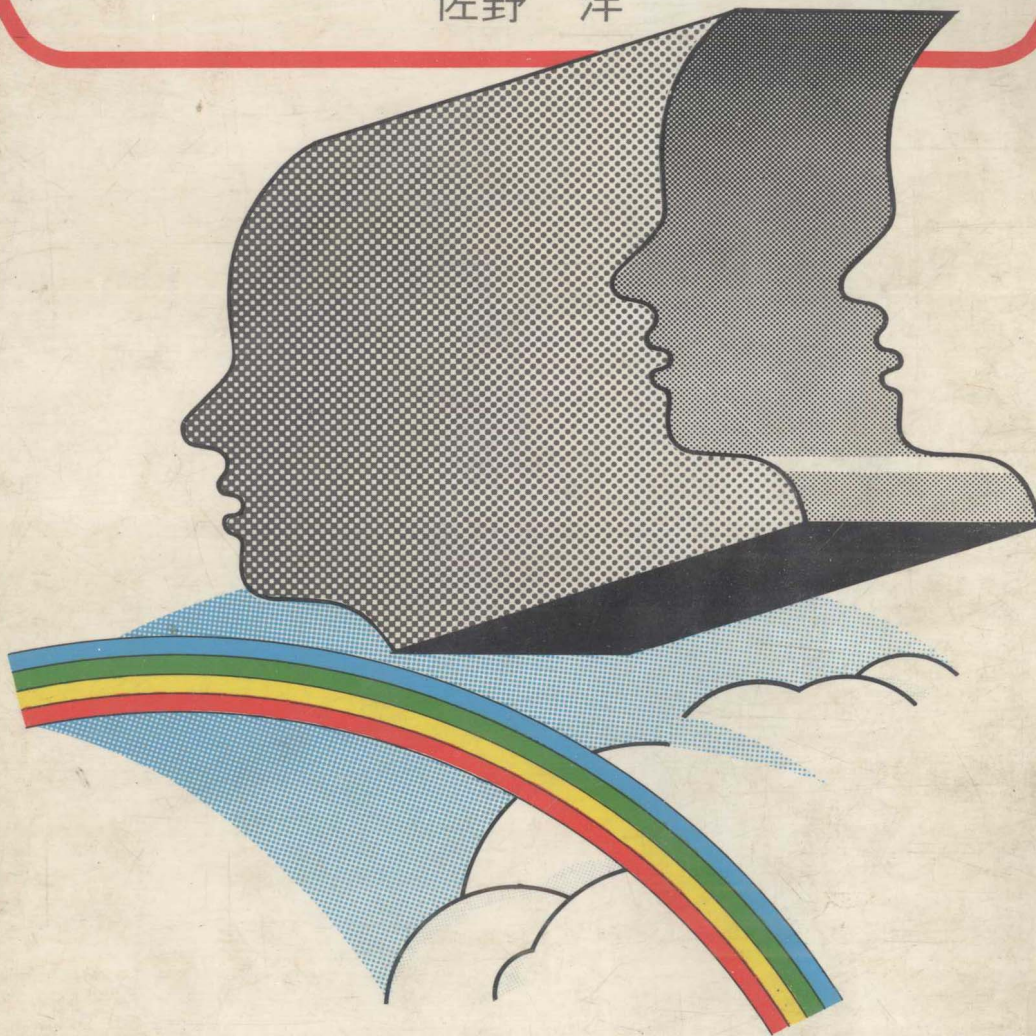
毎日新聞

SF

シリーズ

赤外音楽

佐野 洋



赤外音楽

佐野
洋





●著者紹介

佐野 洋(さの・よう)

1928年東京生まれ。1953年東大文学部心理学科卒。読売新聞記者を勤めているうちに1958年懸賞小説の「銅婚式」で文壇にデビュー。翌年長編「一本の鉛」を東都書房より出版、読売を退社して著作に専念する。1965年「華麗なる醜聞」(光

文)18回日本推理作家協会賞。日

本ペンクラブ、日本推
員。主な著書は推理小説「機
試合」(いずれも光文社)、
台」(早川書房)など。住所
区中央6の11の8

毎日新聞SFシリーズ《ジュニア版》13

赤 外 音 楽

¥ 500

1970年8月20日 印刷

1970年8月30日 発行

著 者 © 佐 野 洋

編集人 宇 野 嘉 彦

発行人 星 野 慶 栄

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋1-1-1 ☎ 100

大阪市北区堂島上2-36 ☎ 530

北九州市小倉区紺屋町7-207 ☎ 802

名古屋市中村区堀内町4-1 ☎ 450

<検印省略>

印刷・共同印刷 製本・大口製本

8093-543013-7904

《 目 次 》

赤外音楽

2

へんな放送
ほうそう

11

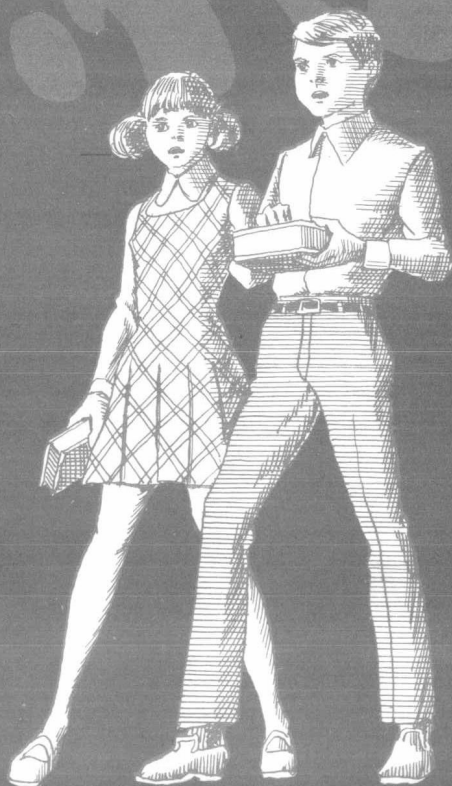
混線か
こんせん

21

打ち合わせ

31

ミュータント科学研究所



152 140 125 114 100 89 78 65 54 43

赤外音

R 6号

リエ子の失踪

二人の男

刑事の質問

報告会

現われたリエ子

兄の変化

一つの実験

不思議な力

赤
外
音
楽

へんな放送

1

二年になったとき、法夫のりおのクラスの数学の担任は高松先生に代わった。

高松先生は、宿題しゅくだいの量の多いことで、全校でも有名な先生である。はたして、法夫のりおたちは、学期の初めから、宿題しゅくだいになやまされどおしだった。ことに、土曜日はひどい。平日の二日分が出された。

クラスの中には、宿題しゅくだいをやっていない者もいた。それでも、高松先生はべつにしからなかった。「勉強しなければ、それだけ、君たちが損そんをするだけだからな。」

と言って、笑わらっていた。

しかし、法夫のりおはいままで、宿題しゅくだいをなまけたことはない。数学が比較ひかく的好かこきだからでもあった。土曜日の夜は、二日分を一度にやってしまうことにしていた。

夕食後、しばらくテレビを見て、すぐに勉強べやにひきこもり、たてつづけに数学の問題もんだいと取り組んだ。

この勉強べやは、兄の順介じゅんけいと共同きょうどうだった。順介はことし大学にはいり、「最初の半年は、思い切り遊ぶんだ。」

と言って、のんびりしていた。法夫が宿題しゅくだいをやっているときも、そばでラジオを聞いていた。ただ、

法夫のじやまにならないように、イヤホーンをつけている。順介は音楽が好きで、ラジオの音楽番組は聞きのがしたことはない。

机の上の置時計が十二時をさしたとき、やっと法夫の宿題はかたづいた。

「あーあ、つかれた。指が痛くなっちゃった。」

法夫は腕をのばしながら、ふり返って順介に言った。

「そうか……。よかったな。しかし、あまり無理するんじゃないぞ。からだをこわしたら、ばからしいからな。」

「ああ、だいじょうぶ。それより、ぼくにもラジオ聞かせてくれない？ 頭がつかれたから、音楽でも聞いて……。」

「ふふふ、なまいき言っちゃがる。」

順介はそう言いながらも、ラジオからイヤホーンを抜き、法夫にも聞こえるようにしてくれた。

『では、つぎに、クイズに移ります。これから、一分間、音楽をお聞かせいたします。みなさまよくごぞんじの、ポピュラーな曲ですから、曲名がおわかりの方は、東京芝居私書箱X号、ミュータント科学研究所に解答をお寄せください。正解者には抽選のうえ、賞品を送らせていただきます。』

女のアナウンサーが、静かな口調で、アナウンスしていた。法夫は机の上の計算用紙に、クイズの応募先を書きとめておいた。

「あれ？　へんだな。こんな放送じやないはずなんだが……。」

順介は、あわてて、新聞のラジオ欄をひろげている。

「いいじゃないの？　ちよっと聞いてみようよ。」

法夫は、クイズに応募するつもりで、耳を澄ました。

やがて、ラジオから音楽が流れ始めた。法夫には、すぐわかった。『青きドナウ』である。ただ、全体の調子が妙に高く、金属的に聞こえたためか、いつも聞き慣れている『青きドナウ』とは、少し違っているようにも感じられる。

「兄さん、これ、シュトラウスの『青きドナウ』だねえ？」

法夫は自信がないので、順介に聞くと、

「え？　何が？」と、順介は驚いたような表情で聞き返した。

「何がって言ったって、この音楽ですよ。いま、ラジオでやっている。」

「おい、法夫。おまえ、勉強しすぎて、頭がどうかしているんじゃないか？　ぼくには何も聞こえないぜ。」

順介が重ねてそう言ったとき、ラジオの音楽は止まった。ちやうど、一分たったのだらう。

「いやだよ、兄さん。いまは、たしかに何も聞こえないけれど、ちよっと前まで、音楽をやっていたじゃないの？　からかうなんて、ひどいや。」

「何言っているんだ。どっちがからかっているんだい？ おまえ、ほんとうに何かが聞こえたのかい？」
「うん。」

法夫は首をかしげた。兄が嘘を言っているとは思えなかった。

「じゃあ、兄さんには、何も？」

「ああ……。しかし、おかしいな。いったい、どうしたんだろう。」

すると、急にラジオの調子が変わった。

『……の名曲であります。』という、男のアナウンサーの声であった。

「そうだ。これなら番組どおりだ。さっきのは、きっと、どこかべつの放送が混線したんだろうな。」

順介はそう言って、満足そうに新聞をはなした。

ラジオからは、法夫が名を知らない交響曲が流れ出した。さっきの「青きドナウ」のように、金属的な感じはしなかった。

この二つを聞きくらべると、たしかにさっきの音は、調子がどこか違っていたと思われるのだった。

《どうしたんだろう？ さっきのは、空耳だったのだろうか？》

法夫は、音楽を聞くことなどそちのけで、そのことを考え続けた。

しかし、いくら宿題をするために、頭を使いすぎたとしても、そんなへんな現象が起こるはずはない
と思つた。

第一、あの女のアナウンサーは、たしかに、

『これから、一分間、音楽をお聞かせいたします。』と言ったではないか。

そして、〃青きドナウ〃は、その直後に流れ出し、ちようど一分間ぐらい続いたのだ。

あれが、空耳だったとしたら、あまりにも偶然すぎる。

法夫はそう思った。そして、

《嘘かほんとうか、ためしてみればわかる》と考え、はがきに解答を書いた。

3

翌日の日曜、法夫は朝早く近所のポストにはがきを出しに行つた。

そして、家にもどると、庭で深呼吸をしていた父が、

「朝っぱらからどこに行つて来たんだい？」と話しかけた。

「クイズのはがきを出して来たんです。」

「ほう、なんのクイズだね？」

「ええ、それが……。」

法夫は自分でも知らないうちに、顔がまっかになった。簡単には説明できないように思ったのだ。

そこへ、兄の順介が顔を出した。

「それじゃあ、法夫はあのクイズに応募したのかい？　どうかしているよ。」

「だって兄さん、ぼくにはたしかに聞こえたんだもの。いいじゃないか、クイズに応募するのは、ぼくの自由だ。」

法夫は口をとがらせた。ゆうべ、へやにいたのは、順介と法夫のふたりだけだ。そして、法夫は「青きドナウ」を聞き、順介は聞かなかったという。

だから、聞いたものと、聞かなかったものの比率は、一対一ということになる。

とすれば、聞かなかった順介が正しいということにはならないはずだ。法夫はそう考えていたのだった。

「おい、どうしたんだ、ふたりとも。お父さんに話してごらん。」

父がそう質問した。

ゆうべのできごとを、順介と法夫が交互に報告した。

「ふうん、おかしいこともあるもんだな、どちらかが嘘を言っているようにも見えないし……。そうだ。ちよつと、こつちに来なさい。」

順介と法夫を座敷につれて行き、耳の試験というのをやってくれた。

それは、ひとりずつ目かくしてたたみの上にすわり、父が耳のそばに時計を近づけたときカチカチと秒をきざむ音が聞こえたほうの手を上げるといふ試験だった。

その試験が終わったとき、父が言った。

「だいじょうぶだ。ふたりとも耳はたしかだから。」

「でも、それじゃあ、ゆうべのことはどうなんでしょう？　ぼくは、たしかに聞かなかったんだし……。」

順介がまた問題のむし返しをした。

「さあね。しかし、いまそれを言っても始まらないだろう。おまえが聞きおとしたのかもしれないし、

法夫の幻聴だとも考えられる。」

「お父さん、幻聴ってなんですか？」と法夫は聞いた。

「うん、実際にはなんの音もしないのに、聞いたような気がするのだ。」

「そういうことは、よくあることなの？」

法夫は心配になってきた。昨夜の「青きドナウ」が幻聴かもしれないと思ったのだ。

「いや、よくあるというわけではないな。酒を飲みすぎてアルコール中毒になった人なんかは、しじゅう、幻聴になやまされるらしいが……。もっとも、神経がつかれたりしていると、たまに、そういうこともあるだろうな。」

「そう。」

法夫は心細くなった。きのうの晩は、数学の宿題で、神経がつかれていたのだろうか？

4

「そうだ！」

急に順介が叫んだ。そして、玄関につけられている電話機をとりあげ、どこかにかけていた。

順介は、やがて、電話を終え、法夫たちのところにもどって来たが、妙に浮かない顔をしていた。

「お父さん、へんなんですよ。どうもわからない。」

「どうしたんだい？」

「いま、高校時代に友だちだった、今西君のところへ電話してみたんです。彼、やっぱり音楽ファンだ

から、あの時間にもラジオを聞いていたんじゃないかと思つて……。」

「うん、それでどうだった？」

父も、この問題には興味を持つていいのか、身を乗り出すようにしてたずねた。

「今西君のところでも、同じなんです。ちょうど、中学二年の妹さんがいっしょにおそくまで起きていて、うちと同じようにラジオを聞いたんですが、今西君には何も聞こえなくて、妹さんのほうは「青きドナウ」を聞いたという話です。彼もぼくの話の聞いて、不思議がつていました。」

「ふうん。そりゃあ、たしかにおかしい。法夫と、今西君の妹さんが、同じ曲目を聞いたんだとすると、幻聴だなんてすましているわけにはいかないな。ぜんぜんべつの場所で、同じ時刻に、同じ幻聴を経験するというのは、あまりにも偶然すぎるからな。」

法夫の父は、しきりに首をかしげていた。父の表情は、法夫がいままで見たこともないほど、深刻であつた。

父は、ある大きな自動車会社の技師をしている。

ときどき、仕事の設計図を家に持ち帰って、書斎で見ていることがある。

そういうときも、父の顔はきびしくひきしまつて見えたが、いまは、それ以上に、むずかしい顔をしていた。

やがて、朝食の時間になった。

食事をとりながらも、父は考えごとを続けているようだった。

「どうなさったんです？」と、母が心配そうにたずねた。

「いや、どうもわからない。」

父は、母に前夜のふたりの経験けいけんを説明せつめいした。

「まあ、気持ち悪い。でも、法夫は昔むかしから、そんなところがあったわ。いつだったかも、夜中ひこに、飛行ひこう機の音がうるさくて眠ねれないと言って、ふとんの上に起き上がっていたこともあるし……。そのときもあたくしには何も聞こえなかったんですけれど、それと同じじゃないのかしら？」

「だってお母さんかあ、あのときは、ぼくまだ小学生だったし、寝ねぼけていたんでしよう？ 翌朝よくあさ、お母さんかあがそう言いっていた。でも、きのうは、寝ねぼけていたわけじゃないし……。」

法夫のりおはけんめいになって弁解べんかいしたが、その途中とちゆうで奇妙きみょうな気がし始めた。

《あのときも、ほんとうは寝ねぼけていなかったのではあるまいか》

という疑問ぎもんが胸むねにわいてきたのである。

自分では、寝ねぼけていなかったのに、母から、

「どうしたの？ 寝ねぼけたりして。」と言いわれて、そんな気になってしまったということも、十分にありうると思おもった。

《とすると、ぼくの耳は、どこか人と違ちがっているのだろうか？》

法夫のりおはまた不安ふあんになった。

混
線
か

1

食事が終わったとき、法夫の父は、

「放送局に電話をかけてみよう。」と言った。

「放送局って？」

「法夫の耳に『青きドナウ』が聞こえたとき、順介は何も聞こえなかった。そうだな？」

「ええ。」

ふたりは声を合わせてうなずいた。

「そして、そのあとは、また普通の音楽にもどったんだな。その普通の音楽を放送していた局はどこだ？」

「ええと、あれは……『ラジオ中央』です。」と、順介が考えながら答えた。

「よし、じゃあ、そこに聞いてみよう。時間は十二時だと言ったな？」

父は立ち上がって、電話機のそばに行った。順介と法夫もついて行った。

電話帳で調べてから、父はダイヤルをまわした。日曜日だから、一般の会社は休みだろうが、放送局は交替で出勤している者がいるはずだった。

相手の交換台が出たらしく、父は、

「ちよっと、ゆうべの番組について知りたいのですが。」と言った。そしてしばらくしてから、

「昨夜の十二時、つまりきょうの午前零時ですが、そのころ、おたくの局で故障はありませんでしたか？」と聞いた。

この問いに対し、相手がなんと答えているかわからなかったが、父はしきりに、

「うん、なるほど……。そうですか？」

と、うなずいたり、いろいろの質問をしたりしていた。

「なんと言っていました？」

電話をかけ終わった父に、法夫は聞いた。待ちきれない気持ちだった。妙に胸が高鳴った。

「うん。ラジオ中央では、べつに故障はなかったという。だが、けさから、同じような問い合わせが、ほかからも二、三回あったそうだよ。『クイズをやると言っていながら、音楽を聞かせなかったのは、どういうわけか？』というような問い合わせらしい。」

「音楽を聞かせないと言うのですか？」

「そうだ。だから、ほとんどの人は『青きドナウ』を聞いていないわけだな。」

「だって……。」

法夫は、また口をとがらせた。自分は、たしかに、あの音楽を聞いたのだ。

「いや、待ちなさい。」と、父は法夫を押しとどめた。

「ラジオ中央の話では、その時刻に、女のアナウンサーは放送していないと言うんだよ。」